



「いいね」と「残念」で行動の枠組を示す

授業中なかなか学習に向かえなかったり、平然と迷惑行為を繰り返したりする子を注意していると、その都度授業がストップしてしまいます。真面目に取り組んでいる子の学びの保障を考えると目をつぶらざるを得ない、でもそれでいいのだろうかと思いつつ授業を行っている教師もいます。

確かに、不適切行動を教師がスルーしてしまうと、子どもは「ここでは何でも自分の思い通りにしていいのだ」ということを学習してしまいます（誤学習）。



不適切な行動の背後には、次のような事情が考えられます。

- ・ 今、気になることを、どうしても今やりたい。 ⇒ 気持ちの切り替えに課題
- ・ 教師や周囲の関心を、自分の方に引き寄せたい。 ⇒ 愛着、周囲の反応に課題
- ・ 何かのめり込み、今、何をすべきか忘れている。 ⇒ 注意の集中（配分）に課題
- ・ 教師への敵意が強い、又は教師を甘く見ている。 ⇒ 人間関係に課題
- ・ そもそも行動の適切・不適切が理解できていない。 ⇒ 未学習、誤学習

ここでは、これらに共通した対応を2つ挙げます。1つは、子どもが聞き入れるかはともかく、何が適切な行動で、何が不適切な行動なのかを明確に伝えることです。

まず、望ましい言動が見られたときに間髪入れず「〇〇さん、いいね / 今の言葉、素敵だね / グー」など支持を表明します。個人名プラスひと言、2～3秒で済みますので出し惜しみせず「いいね」のシャワーを浴びせます。

特定の子や学級としての課題、例えば発言の仕方や話の聞き方、誰かが失敗したときの声のかけ方など、ポイントを定めると良いでしょう。課題を抱える子ばかりに偏らないようにします。

また、不適切な言動に対しては、「〇〇さん、残念 / 今のはチクチク言葉だよ / こうするんだっただね / こうして欲しいな」などの言葉をかけます。

ヒステリックな叱責、くどくどと長い説教、理由をとことん問い正すことや反省の弁を無理に引き出そうとすることは、それ自体がチクチク言葉であり逆効果です。

もちろん、命にかかわる危険行為は、体を張ってでも食い止めなければなりません。その一方で、スモールステップの指導として、当面は行動の許容範囲を広げる場合もあります。これについては校内で検討し、共通理解を図ることが大切です。

不適切行動が適切な行動に切り替わったら「いいね / グー」、笑顔とともにです。肯定的なひと言を「残念」よりも相対的に多くすることも大事なポイントです。

すぐに改善が図れなくても、子どもの行動を教師がしっかり受け止めジャッジしていることを、当該の子どもはもちろん、全員が理解できることが大切です。それが子どもたちにとって、行動の適否を判断する「ものさし」になるからです。